

佐藤紅緑(さとう・こうろく) ☆常設展示作家

1、佐藤紅緑の生涯

<生涯1 幼少年期> 0歳～18歳 1874～1892

明治7年、弘前市親方町に、父弥六・母支那(しな)の次男として出生。

本名治六。父は慶応義塾の福沢門下となったが、兄の死により帰郷、啓蒙的活動をし、県会議員ともなった。紅緑の奔放な性格は、父譲りといわれる。

13年元大工町に転住、朝陽小学校に入学。幼時から非常に腕白であったが、祖母と姉の慈しみによって豊かな感性が養われた。

23年東奥義塾を中退、青森県尋常中学校(現弘前高校)に入学、雑誌「覚眠」を刊行したともいわれるが、その名をむしろ撃剣や蛭カラで馳せていた。やがて3年生頃から、校友会誌に北柳山人の号で、和歌、長詩、文章を載せるようになる。

<生涯2 青年時代(新聞記者・俳人)> 19歳～31歳 1893～1905

明治26年、遠縁に当たる陸羯南を頼って上京、翌年日本新聞社に入る。正岡子規の勧めで俳句を始め日本派の有力俳人となってゆく。

28年病により帰郷、東奥日報社に入り、小説、俳句などで活躍。29年東北日報社(翌年河北新報社)の主筆。佐々醒雪らと奥羽百文会を興す。32年弘前に「陸羽新報」を創刊するも失敗。同地に俳句結社大平会を興す。33年報知新聞社に入り大隈重信に重用される。34年関心を寄せていた政治活動を断念。この間31年富山日報、36年福井新聞、38年大阪関西日報など各社を転々と渡り歩いた。

以上の記者活動の他日本派俳人として活躍、『滑稽俳句集』『俳諧紅緑子』などを刊行。また、デューマ、ユーゴーなどの翻訳もした。

<生涯3 前期活躍期(劇作家・俳人)> 32歳～37歳 1906～1911

明治38年、記者生活を止め、俳句研究会を起す。門弟に千家銀箭峰(元麿)佐藤酔花(惣之助)室積徂春、伊藤葦天らがいた。

39年6月、俳誌「とくさ」の監修者となる。10月、高田実の要望に応えた脚本「俠艶録」の上演が大成功、本郷座の座付作家として名声を得る。

また、小説「あん火」「鴨」など自然主義風の作品により注目を浴び、41年創作集『楯(ほだ)』を刊行。

この間、「都新聞」の俳壇選者(明治38～45年)となったが、俳文学じたいの限界を考え俳句から身を引き、「とくさ」監修を辞す。

41年に小石川音羽町から同茗荷谷に移る。音羽町には真山青果、茗荷谷には福士幸次郎が寄宿。福士は佐藤家の執事役で献身した。

<生涯4 中期活躍期(劇作家・小説家)> 38歳～51歳 1912～1925

大正元年小説「霧」(「大阪日日新聞」)翌年「谷底」(「時事新報」)をはじめ新聞連載小説を発表。4年劇団新日本劇の顧問となり、女優横田シナ(後、三笠万里子と改名)を見初める。

5年日本座を結成、経営維持のため何本もの新聞連載小説を書く。7年妻はるとの別居、長男八郎の父島行き(福士幸次郎を伴う)などを経て、11年万里子と結婚。

この間彼女のために日本座の各地興行を試みるが、12年神戸公演を最後に断念する。

同年映画研究のため渡欧、翌年東亜キネマの所長(14年退任)。8年から昭和2年にかけて新聞雑誌に連載小説「大盗伝」(10年)「荊の冠」(11年)「富士に題す」(昭和2年)を書き大衆小説の人気作家となる。

<生涯5 後期の活躍期・晩年(小説家・俳人)> 52歳～75歳 1926～1949

昭和2年加藤謙一の懇願で少年小説「あゝ玉杯に花うけて」を「少年倶楽部」に連載、好評を呼び、「少年讃歌」「英雄行進曲」などを書き、同誌の黄金期を築いた。同社の雑誌「キング」などにも多くの連載小説がある。

14年、久しく縁を切っていた俳句への関心が再燃、紅緑を中心とした俳句研究所が作られ、18年句集『花紅柳緑』が紅緑会から刊行された。昭和19年10年間住んでいた甲子園から静岡県興津町に転居。昭和22年5月、東京都文京区向ヶ丘の長男八郎の家に同居。

23年世田谷区上馬に移り、24年6月3日永眠する。享年75歳。

2、佐藤紅緑の代表作

○句集『花紅柳緑』

昭和18年9月10日、六人社刊。408ページ。題句に高浜虚子の<隣合ふ実梅の如くありしこと>が付されている。あとがき、伊藤葦天。総句数 3050 句。表題「花紅柳緑」、内題に「佐藤紅緑集」とする。明治27年から昭和17年までの句から自選した。古稀の記念として、同好の士にわかつ目的で、紅緑会が刊行した。

紅緑独特の滑稽句や、動きのある句もあるが、淡々とした事実吟詠が多いといえる。

春の山町の人語が聞こえぬる 紅緑

囀や水滴々と手水鉢 紅緑

○小説「あん火」

明治39年11月、「中央公論」に発表した短編小説。当時流行の自然主義的作品として文壇の注目を浴びた。

65歳の農夫佐吾十が、養女のお福を幼少時からあん火がわりに抱き寝してすごした。やがてお福と雇い人の間を知って2人を結婚させるが、佐吾十は憂うつな虫にとりつかれ、仕事もせずに家にこもるが、ある大嵐の翌朝、枝の裂けた林檎の大木を見ながら、お福を抱き寄せるという筋である。

夏目漱石は評して、“通篇西洋臭い。……あれは焼き直しじゃないか。然し田園の光景が面白かった。”(明治39年11月6日、森田草平宛書簡)などとその成功を認めた。確かに田園の描写はローカル色豊かに活気があり、写生文系のものではない。西洋風は当時紅緑が、モーパッサンに凝っていたからだと言われる。

この系統の作品は、創作集『楯』(明治41年4月)に収められているが、後にこの種の作品がないだけに、光彩を帯びているといえる。

○戯曲「俠艶録」

「俠艶録」(明治39年10月本郷座上演)は、新派の人気俳優高田実の求めに応じて書いた処女脚本で、小栗 風葉の「鬘下地」、広津柳浪の「乱菊物語」に材を採った作品で、歌舞伎を劇中劇にとり入れる趣向をこらした。

瀬尾子爵の1人娘雪子の許嫁である養子富士雄が、従兄弟弓彦の奸計で廃嫡となり、死を覚悟した時、女優 坂東力枝に助けられて夫婦となり、子をもうけ、やがて大学を卒業し学問に励む。一方、弓彦と結婚した雪子は、操を守って家出した後、弓彦は放蕩にふけり、奸計を暴露され離籍。やがて富士雄の身分を知った力枝は 身を引き、養父の危篤に子爵家にもどった富士雄は雪枝と結婚する。力枝は愛人を失い、行方不明の我が子恋しさに舞台上で発狂する。富士雄は、わが子も判らぬ力枝に会い、子を抱きしめて苦悩する。

紅緑のねらいは、甘く観衆うけするところにあり、それが図に当たって人気狂言となり、上演を重ねたのである。

○少年小説『あゝ玉杯に花うけて』

少年小説の第一作「あゝ玉杯に花うけて」は、「少年倶楽部」の編集長加藤謙一の懇望によって、昭和2年5月から連載を始めた。

主人公チビ公こと青木千三は、貧乏のため進学できず、豆腐を売っている。これを助ける親友、私塾の黙々先生、これに敵役の悪玉中学生が配される。先生直伝の沈毅、明智、剛勇を身につけた主人公は、世間の虚偽に負けず、政治的不正に屈せず、理想の道を歩んで、念願の一高受験に成功し、寮歌を唱うという話である。

この小説は熱狂的に少年たちに迎えられ、掲載誌は 30 万部から 45 万部に発行部数を伸ばした。

現代人の感覚からは無条件に認められないかも知れないが、紅緑の少年を愛する情熱と、敢為の正義感が基底にあることが、独特のジャンルを開拓させたのである。奥野健男が、教育者と文学者との総合という仕事の〈先駆者〉と称するゆえんである。

3、佐藤紅緑のキーワード

<キーワード1 栗見れば柿見れば林檎赤ければ>

紅緑の「子規先生墓前」の詞書きのある1句である。〈物として師を思い出さざるものはない〉という心境。それを、万象師影を思わしむなどと、ありきたりに言

わず、「…れば」の後の言葉を略して言わざるところに、師を思う万感を余情として感じさせるように詠んだ。

こうした余情を、一種のリズムの軽みに詠みこんだのは、紅緑の面目を示すものといえよう。

子規は紅緑を評して、「紅緑に一種の理想あり。露月の如く支那的にもあらず、忙大的にあらざれども…」と言ったが、これらは彼の句が単に写実の域に止まるものではないことを言ったものである。子規の言の中には、紅緑の特色である、滑稽味をも暗示するところもあって味わいがあるといえよう。

<キーワード2 政治家以上の政治家>

憲政擁護運動に尽くし、東京市長ともなった尾崎行雄は小説『富士に題す』に序を贈って次のように評した。

時代の思潮は急速に流れている。この潮流の本質を見究め、その方向を直視することは、凡庸な政治家のよくするところではない。紅緑君はこの点に於て政治家以上の政治家である。…更にまた之を現状と対照する時に、明日の日本が何処へ行くか、ある暗示を受けるであらうと思ふ。(昭和5年)

これは『富士に題す』が、日露戦争における、政治家、軍人、庶民などの各層が、どのように行動したかを活写し、政治の裏面までをえぐり出した構想力、描写力に感動し、昭和初年の激動期に国民がどのような指針で生くべきかのよい示唆となろうと論じたのであった。

<キーワード3 友情と義侠と師弟の愛>

紅緑は、「私の小説について」(「少年倶楽部」・昭和3年 12月)という文章で、「私が『あゝ玉杯に花うけて』において諸君の前に提供した問題は、やはり友情と義侠と師弟の愛でした」と、自作の趣旨を述べている。

彼の少年に対する愛情を端的に吐露したのものと言えるであろう。

4、佐藤紅緑のゆかりの場所

①紅緑が誕生した場所

現在生花店(オザキ・フローリスト)(弘前市親方町 28 番地)

紅緑誕生の年(明治7年)から20年後の明治27年作成の図面(弘前市役所蔵)によって28番地が確かめられる。

ただし同番地はその時点で、ふたつに分筆されていること、さらに所有者が父弥六ではないことも土地台帳で確認される。

②紅緑の句碑

弘前市立朝陽小学校の校庭(弘前市在府町 36 番地)

昭和55年3月、紅緑の母校である朝陽小学校の在府町通りに面する校庭の一角に、同校父母と教師の会によって句碑が建てられた。

左隣に「希望の碑」と題して、子供たちが大先輩に見習うことを願う建立の銘を刻んでいる。

碑面 雀の子飛ばんとしては飛ばんとす 紅緑 (福士夕湖 揮毫)

③紅緑の墓

喜福寺の墓所(東京都文京区本郷5丁目)

東大赤門前の喜福寺墓地に建立されている。黒御影の石に「紅緑之墓」と寒川鼠骨の筆で刻まれている。碑陰に「昭和二十四年六月三日歿 子規門友鼠骨虔書」とある。一周忌に際しての建立で、法要、納骨のあと、『紅緑句集』の出版記念会が開かれた。右側面に、「昭和四十七年三月三十日歿俗名佐藤しな 享年七十八才」とある。

④紅緑の句碑

丸山教本庁前庭(川崎市多摩区登戸 1274)

「天地のはじめの畑を誰が打ちし 紅緑」と摂州本御影石に自筆。

碑陰には「昭和十六年四月建立、門人佐藤惣之助、柚利柚里、当麻答郎、伊藤葦天」とある。両側に「句碑の句の中より雲雀鳴きいでよ 惣之助」「ひとりだけ残りし信者炉辺親し 九十一葦天」の句碑。

5、佐藤紅緑の関連人物

☆陸羯南(くが・かつなん):思想の師

明治 26 年、紅緑の上京は遠縁と言われる陸羯南を頼ってのことであった。

紅緑が国学院などに落ちつかず図書館通いをしていた当時、小説を書くことを戒めて、国家大問題の論策を勧めたのは羯南であった。

明治 34 年報知新聞社退社後、政治に絶望するまで、進歩党への入党、大隈重信への接近など、紅緑の記者生活には政治活動が伴っていた。

あまり評論の対象にならない新聞小説の中に、政治、経済、国家問題がなまなましく採り上げられているのも、羯南の影響といえるであろう。国家主義的であることと、反骨精神との共存といった紅緑のあり方は師に原型を見ることができよう。

☆正岡子規(まさおか・しき):文学の師

紅緑の師、子規は多くの評言を残している。それが紅緑への影響を暗示することは論をまたないが、弟子として師の古俳書研究に見習った著作が注意される。子規が露月と、紅緑を対比し、沈黙・遅鈍に対し多弁・敏捷、「大に健に」に対し、「小に巧なり」と評したのは著名。また、松窓乙二の調ありとか、滑稽句に特色ありとも評した。おそらく、紅緑もそれらの自分の特色を自覚し、自らに課する所があったのである。これを子規側から言えば、角をためて牛を殺す、狭量の師たらんとはしなかったということになろう。彼の機略と活動性は、大衆小説の文体としても生き続けている。しかし、一方紅緑は子規に一俳句に止まらぬ、人生の師を見ていたといって過言ではない。

6、佐藤紅緑の資料紹介

- さかしまに湖にうつるもの皆涼し
 - ふとんきてあらぬところに枕かな
 - 燭剪れよあまり淋しき秋のくれ
- 書画(短冊)

各 360 mm × 60 mm

紅緑俳句収載集としては、『俳諧紅緑子』『紅緑日記』『花紅柳緑』『紅緑句集』がある。

○「恐ろしき物語」

原稿

1911(明治 44)年3月1日

240 mm × 161 mm(×9枚)

「恐ろしき物語」は「文芸倶楽部」第 17 巻第4号に掲載された。紅緑の原稿は珍しい。

7、佐藤紅緑年譜

1874(明治7)年…7月6日、弘前市親方町 28 番地に、父弥六、母支那の次男として生まれる。

1880(明治 13)年…朝陽尋常小学校に入学。

1890(明治 23)年…青森県尋常中学校(現弘前高校)に入学。

1893(明治 26)年…中学を退学、上京、陸羯南の書生となる。

1894(明治 27)年…7月、日本新聞社に入社。正岡子規の勧めで俳句を作り始める。紅緑の号は子規の命名。

1895(明治 28)年…夏、脚気のため帰郷、東奥日報社に入る。

1896(明治 29)年…仙台市の東北日報社(翌年河北新報と改む)に入社。

1897(明治 30)年…5月、鈴木はると婚姻届出。佐々醒雪らと奥羽百文会を起こす。11 月社長と意見を異にし退社。

1898(明治 31)年…大隈重信の推薦で富山日報社に主筆次席として入社。

1899(明治 32)年…病のため帰郷、弘前の新派俳句会太平会を結成。

1900(明治 33)年…陸羽新報社を起こし失敗。報知新聞社に入社。北清事変の特派員となる。

1901(明治 34)年…報知新聞社を退社。植村正久の福音新報編集。

1902(明治 35)年…『俳句小史』刊行。

- 1903(明治 36)年…福井新聞社入社。
- 1905(明治 38)年…大阪関西日報社入社。記者生活を断念、俳句研究会を始める。「蝸牛日記」読売新聞連載。
- 1906(明治 39)年…「俠艶録」本郷座上演。自然主義小説「あん火」中央公論に発表。俳誌「とくさ」監修。
- 1907(明治 40)年…「新ハムレット」「雲の響」本郷座上演。
小説「鴨」「地蔵子」発表。
- 1909(明治 42)年…「陽炎」「人の親」本郷座上演。
- 1911(明治 44)年…「姉と妹」「雪の夜」帝国劇場上演。
- 1912(明治 45)年…「日の出」「母」帝国劇場上演。
- 1913(大正 2)年…小説「谷底」時事新報、小説「礎」関西日報。
- 1914(大正 3)年…「嵐」時事新報、「光の巷」読売新聞、「鳩の家」読売新聞連載。
- 1915(大正 4)年…小説「虎公」読売新聞連載。劇団新日本劇参加。
- 1916(大正 5)年…小説「母と子」大阪朝日新聞、同「日の出る国」読売新聞。
新日本劇団解散、日本座を作る。
- 1917(大正 6)年…小説「桜の家」大阪時事新報。
- 1918(大正 7)年…日本座解散。
- 1919(大正 8)年…小説「乳房」報知新聞、同「黄金」大阪朝日新聞。
- 1921(大正 10)年…小説「大盗伝」東京毎夕新聞。
- 1922(大正 11)年…小説「大慈大悲」報知新聞。
- 1923(大正 12)年…外務省囑託として、映画研究のため外遊。
- 1924(大正 13)年…東亜キネマに入社。
- 1925(大正 14)年…同退社。小説「楽園の扉」講談倶楽部。
- 1926(大正 15)年…小説「東西南北の人」面白倶楽部。
- 1927(昭和 2)年…小説「富士に題す」講談倶楽部、少年小説「あゝ玉杯に花うけて」少年倶楽部。
- 1929(昭和 4)年…少年小説「少年讃歌」少年倶楽部。
- 1930(昭和 5)年…小説「野に叫ぶもの」大阪毎日新聞。
- 1932(昭和 7)年…少年小説「少年連盟」少年倶楽部。
- 1934(昭和 9)年…少年小説「英雄行進曲」少年倶楽部。
- 1935(昭和 10)年…少女小説「あの山越えて」少女倶楽部。

1936(昭和 11)年…『佐藤紅緑全集』(全 16 巻 17 冊、アトリエ社)

1938(昭和 13)年…少年小説「街の太陽」少年倶楽部。

1943(昭和 18)年…句集『花紅柳緑』(紅緑会)。

1947(昭和 22)年…東京都文京区向ヶ丘の八郎宅に同居。

1949(昭和 24)年…6月3日東京都世田谷区上馬町において没す。

1950(昭和 25)年…遺句集『紅緑句集』(講談社)。